

研修医に選ばれる病院を目指して —臨床研修を支援する教育研修部門の役割—

松山赤十字病院 教育研修推進室

宇都宮 広志 藤崎 智明 竹田 喜久恵 藤渕 由紀

We aim at the hospital chosen as many junior residents.

—The role of education and training sector to support the clinical training—

Hiroshi UTSUNOMIYA, Tomoaki Fujisaki, Kikue TAKEDA, Yuki FUJIBUCHI

Japansen Red Cross Matsuyama Hospital

Key Words：臨床研修、カンファレンス、教育研修推進室

1. はじめに

当院の最も力を入れる戦略的目標の一つに「研修医に選ばれる病院作り」がある。この目標を達成するために一事務職員として、そして教育研修推進室として、「何ができ」、「何をすべきか」、「求められている役割とは何か」について、支援の実際から考察したので報告する。

2. 戦略的目標の設定

図1は、当院におけるここ数年の初期臨床研修医マッチング状況である。平成18年度にフルマッチを達成して以降、フルマッチすることはなく、ここ数年はマッチング数も減少傾向にあった。平成23年度に至っては、定員枠12名に対して最終マッチング数は3名となっている。

この結果を受けて、選ばれる病院になるために何が必要で何が足りないのか、検討を重ねることになった。図2は、次年度の重要戦略を決めるために行っている戦略会議で検討された内容の一部抜粋である。

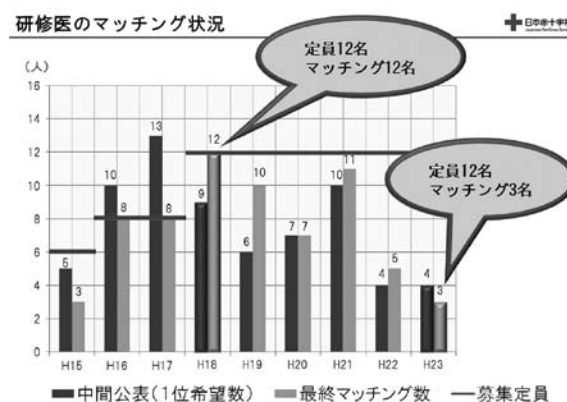


図1

「研修医及び医学部生」をターゲットに、自院の「強み」、「弱み」といった内部環境分析、そして「機会」、「脅威」といった外部環境分析を行いながら、平成24年度の戦略的目標の一つに「研修医に選ばれる病院作り」が掲げられた。

これにより院内各部門では、この戦略的目標を達成するための具体的な取組みがスタートすることになった。なお、本戦略は単年度で終わることなく、若干の修正を加えながら平成25年度以降も引き継がれている。

(補足) ここでいう研修医とは、当院で研修を行っている初期臨床研修医及び近い将来、当院での初期臨床研修を進路選択の一つに考

えている医学部生を総称して、研修医と定義している。

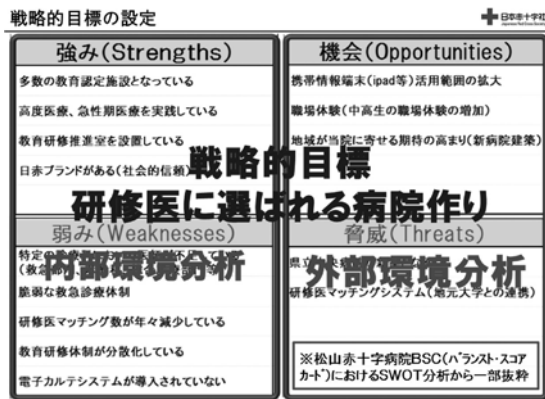


図2

3. 方法

以前から、院内全体の教育研修機能が分散しているとの指摘を踏まえ、今回の取り組みに合わせて、研修医及び一部の指導医のみで開催していたカンファレンス、そして新たに開催することになったカンファレンスの企画、運営、広報を「教育研修推進室」に集約化させた。また、他部署が主催する研修会にも積極的に参加し、運営補助を行う等、教育研修推進室として後方支援業務を拡大させ、院内における顔の見える関係の構築に注力した。

加えて、研修医以外が聴講しても有益なカンファレンスは、参加対象を全職員に拡げる等、研修医を応援しながら共に学べる研修環境の構築を目指した。

そして、これらの取組みと研修医を含めた他部門の評価から教育研修推進室が担うべき役割(図3)を抽出した。以下では、どのように教育研修推進室が関与していったのか、



図3

一部事例を挙げて説明する。

(1) 救急部カンファレンス

救急部カンファレンス(図4、5)は、研修医からの要望を形にして新たに立ち上げたカンファレンスである。毎年実施している研修医アンケートにおいて、救命救急センターを有していない当院の救急部門研修では、「輪番制救急担当日より以外では、研修医が考える場面が少なく、また輪番制救急日に担当した症例についてフィードバックしてもらえる機会が少ない」との意見があった。そこで、研修医が救急当番日に担当した疑問に思った症例を一例提示し、その症例について専門診療科の指導医がミニレクチャーを行う、救急部カンファレンスを立ち上げることになった。

カンファレンスの立ち上げに際して、研修医や若手医師からは、「病院内で唯一ホッとできる時間帯は昼食を食べている時である。」、そして指導医からは、「研修医に色々教えてあげたいけど、夕方はなかなか時間が取れない。」と言った意見が寄せられた。

そこで、医師をはじめとした医療従事者にとって参加しやすい、そして参加したくなる時間帯として、毎週金曜日12時30分から13時00分(昼食の時間帯)での開催が決定した。教育研修推進室担当者の想いとしては、参加者に「ホッと一息ついてもらいながら、美味しいものを食べてもらうこと。」を企画に盛り込むことにした。

なお、開催にあたってのコンセプトは、各診療科の垣根を取り払って、研修医のために医療従事者が集まる「魅力ある研修の場の創造」とした。

第1回目は20名で始まったカンファレンスが、1年後の第47回目には100名を超える参加者が集まることになった。

この取り組みを実施するにあたっては、瀧上忠彦院長(現名誉院長)、横田英介副院長(現院長)をはじめとした幹部職員の理解と後押し、そして実際の救急部カンファレンスの企画、運営(司会・進行)を行ってくれている藤崎智明救急部部長(第一内科部部長)の協力が、教育研修推進室の支えになっていることは言うまでもない。

救急部カンファレンス



救急部カンファレンス

研修医が救急部門研修中に判断に迷った症例を1例提示し、専門診療科の指導医がミニレクチャーを行う。

開催日 毎週金曜日 12:30～13:00

形式 ランチョン形式

参加者 研修医、各診療科医師、メディカルスタッフ等

図 4

救急部カンファレンス



図 5

(2) 広報媒体としての有効活用 (その1)

救急部カンファレンスをはじめとして、特に研修医が参加するイベントについては、当院の初期臨床研修をアピールする絶好の機会であると捉え、松山赤十字病院初期臨床研修SITEに毎週掲載するとともに、掲載後は松山赤十字病院公式 facebook へ自動的に投稿されるよう設定している。(図6)

広報媒体としての有効活用



図 6

(3) 広報媒体としての有効活用 (その2)

「臨床実習を行う医学部生」や「病院見学者」には、救急部カンファレンス等への参加を促

し、見学者自身に当院での初期臨床研修の一場面を体感してもらうことにしている。現在までに延べ192名の医学部生が救急部カンファレンスに参加した。

4. 結果

事務局業務を集約化し、全面的に開催支援を行った結果、研修医及び医師を中心とした多職種職員、そして医学部生が積極的にカンファレンスに参加するようになった。(図7)

各種カンファレンス等の参加状況



| 名称 | 平成24年度 | | | | 平成25年度（上半期） | | | |
|------------|--------|-----|-----|-----|-------------|-----|-----|-----|
| | 研修医 | 医師 | その他 | | 研修医 | 医師 | その他 | |
| モーニングレクチャー | 615 | 159 | 85 | 371 | 665 | 276 | 55 | 334 |
| 救急部カンファレンス | 1,386 | 264 | 647 | 475 | 1,539 | 342 | 669 | 528 |
| 救急部勉強会 | 491 | 28 | 66 | 397 | 314 | 41 | 34 | 239 |
| 研修修了発表会 | 94 | 94 | | | — | — | — | — |

図 7

この結果は、病院が掲げた戦略的目標の一つである「研修医に選ばれる病院作り」を各部署職員が共有し、同じベクトルを向いて取り組めたことが大きな要因であったと感じている。また、平成24年度には新たな取組みとして、「研修医とともに学ぶ—職種を超えた知識の向上—」を合言葉に検査部が「検査部ワークショップ」を、平成25年度には病理診断科部が「病理診断科部ワークショップ」を、そして放射線科部が「放射線科部ワークショップ」を企画・開催してくれた。(図8)



図 8

職員一人ひとりに「研修医を育てる」という意識が芽生え始め、組織文化として定着してきたことを実感できた一例である。

教育研修推進室を中心に様々な取り組みを行った結果、平成 24 年度はフルマッチを、そして平成 25 年度においても 2 年連続でフルマッチを達成した。

教育研修推進室が担い、そして求められた役割は、以下のとおりである。

- (1) 研修医をはじめとした職員が参加しやすい研修環境の提供。
- (2) カンファレンス計画のコーディネート及び進捗管理。
- (3) 研修医と指導医及び多職種他部門との橋渡し役となり、「職員全員で研修医を育てる」という意識改革の推進役。
- (4) 研修医を主役にした各種媒体を通しての広報活動の展開。

5. 今後の課題

カンファレンスの更なる充実とその評価を行ない、研修医の満足度向上に繋げる。そして、研修医のみならず全ての医療人から信頼される教育研修部門となり、病院の基本方針にも掲げられている「次代を担う医療人を育成・支援する」ために、更に活動範囲を広げていく。そして事務職員としては、経営マネジメント能力の向上に努め、全ての医療従事者がその専門的能力を発揮できるような環境を整備するとともに、多職種他部門から信頼される事務職員となることを目指して行く。